

万葉の川心

横浜市教育委員会
東部学校教育事務所
澤井園子

二上山の賦一首 この山は射水郡にあり

(巻第十七 三九八五番歌)

射水川 い行き廻れる 玉匣 二上山は 春花の
 咲ける盛りに 秋の葉の にはへる時に 出で
 立ちて 振り放け見れば 神柄や 許多貴き
 山柄や 見が欲しからむ すめ神の 裾廻の山の
 洪谿の 崎の荒磯に 朝風ぎに 寄する白波
 夕風に 満ち来る潮の いや増しに 絶ゆること
 無く 古ゆ 今の現に かくしこそ 見る人
 ごとに 懸けて俣はめ

伝えたい想いがあふれると、相手に対して、言葉を尽くして詳しく表現しようとする。例えや経験談を入れて具体的に示せば、それが誠実であり、親切な表現だと思っていた。ところが、情報が多すぎて、かえって伝わらないことが多い。書き言葉は何度でも推敲することができるが、話し言葉は瞬間に表れては消えていく。相手の表情を見ていると伝わっていないことは一目瞭然。かけた労力の分だけへこむ。説明、感想、告白、説得：…各々の状況で構成を変えるのが良いのだが、これがなかなか上手くいかない。そのくせユーモアも忘れたくないという欲もあり、「相手に伝わる話し方」は自分の中の果てないテーマになっている。

歌は、三月三十日に詠まれた大伴家持の賦（長歌）である。旧暦なので時



高岡市万葉歴史館 正面にて

は立夏を過ぎている。主題は「二上山」なのだが、冒頭から端的には出さない。神の鎮座する山の条件には、川が取り巻いていることがある。射水川：あの清らかな流れが行き渡り、駆け巡る様をまず歌う。聞き手、読み手の想像力を広げた瞬間の「玉匣」。玉匣とは櫛を入れる立派な入れ物のことであり、その蓋、つまり、二上山にかかっている。二上山に春の花が咲き誇る風景、秋の紅葉が照り映える美しさ。行ったことのある人もない人も、個々の目前に映像が広がる。「それらを遙かに見渡せば、神の山であるが故に貴いのか、山そのもののもつ魅力だろうか、見たいと思われることだ。朝に打ち寄せる波があり、夕に満ちる潮がある。増していくごとく、絶えることなく、ここでもうして二上山を眺める者はみな古からこうであった。心にかけて、賞美するであろうよ。」詩も歌も、すつと心に入り、つかんで離さない。そして、何かを残していく。今回の川は、名わき役。山の神々しさを象徴している。

写真の歌碑は、富山県高岡市伏木一宮にある高岡市万葉歴史館の正面にある。いつ、だが、どこで、何を、なぜ、どんな風に、何を思っ：…頭ぐるぐるで必死に話す私の前で、笑顔でうなずきながら聴いてくれる人がいる。その空気が好きだ。万葉集に学びつつ、聴いてくれることに感謝しつつ、進歩は余りないけれど、大切な人だからこそ、感じたことを伝えていきたい。